Thailand で学んだこと

08L029　大崎　龍史

　チェンマイ空港に着き空港を出た瞬間のことであった。何とも言えない匂いがした。それは東南アジア特有の匂いで、大変衝撃的であった。そして、年中夏の気候であるため 3 月上旬であったが、37 度を上回る気温に唖然とした。タイには世界的にも有名な涅槃増や王宮やとても華やかなお寺が多く建築されている。右の写真のように本当に圧倒させられるものばかりであった。しかし、このような気候の中、よく多くの歴史的建造物が建てられたなあと思った。そんな背景の中、タイでの生活が始まった。

　さて、ここからは私がタイで経験した事を取り上げていきたい。まずは宗教に関して、タイは日本と同じ仏教国であるが、タイの人は一生に一度は僧侶にならなければいけないという文化がある。托鉢や数時間もの間の礼拝など、大変だと思う。しかし、仏教が生活の中の生きた文化であるように感じた。僧侶やお坊さんを尊敬し、アットホームなお寺もあり、英語が話せる僧侶もいて仏教の事を質問すると心良く答えてくださった。

　そして、タイの料理であるが、唐辛子などの香辛料がふんだんに使われており、とにかく辛かった印象がある。また、タイ米で作った炒めご飯やマンゴと餅米で作られたデザートは本当に美味しかった。しかし、日本では考えられないような食べ物がたくさんあった。芋虫の唐揚げ、卵が腐ったような匂いがするドリアンというフルーツ、小便の匂いのする調味料などなど。食べてみたが、まあ好んでは食べたくないと感じた。

　また、チェンマイとドイ・タオの２カ所の町をホームステイしたのだが、ドイ・タオで衝撃的であったのがトイレである。トイレといえば便座があってトイレットペーパーがある洋式を想像するが、タイの田舎のトイレは洋式にもかかわらず、便座がなくてトイレットペーパーもない。トイレットペーパーの代わりにあるのが水が出るノズルのようなものであり、これでお尻をきれ

いにするらしい。衝撃的であった。（笑）

　他にも、像に乗ったり、タイ式マッサージをしてもらったり、川で泳いだり、孤児院に行って折り紙や習字などの日本の文化を教えてあげたり、チェンマイの大学生にタイ語を教えてもらったり、ニューハーフショーをみたり、本当に充実していたように感じる。日本では経験できない事を本当に多く経験できた。

　タイという国を一言で表すと、「笑顔の国」だと思う。タイには、全然知らない赤の他人でも目が合えば「にこっ」と微笑む文化がある。この文化はアジアの国ではタイだけであるかは分からないが、少なくとも日本や韓国、中東のアジア圏などでは考えられない文化である。この背景には、ホスピタリティーの高さが関係していると感じた。タイという国はミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアの４つの国と国境を有している。これら４つの国は紛争や飢餓、貧困などの何かしらの問題を抱えた国である。それらの国と良好な関係を築いていく上で、タイの人たちは笑顔で歓迎の意を表現するようになったのだと思う。実際にタイで、全然知らない人に「にこっ」と微笑まれると、照れるというか心がほんわかして、happy な気持ちになり、歓迎されているように感じた。しかしその一方で、タイには貧困で苦しんでいる人が多くいる。タイの人の一日（就労時間８時間として）の平均賃金は約 400 円であり、道には物乞いをしている人がちらほら見受けられた。また、非常に格差が大きい。日本の戦後のような生活をしている人々もいれば、まるで大阪のような都会で生活をしている人々もいた。また、会社勤めの人もいれば、像使いとして生活している民族や、屋台で生計を立てている人々もいた。本当に多彩な生き方がある国だと思う。

　そして、今回タイの文化を学んでいて思ったのが、日本の文化がタイの文化の一部になっていることである。日本のマンガやお菓子の人気は非常に高く、タイの道を走っている自動車の 60 パーセントはトヨタ車である。テレビに流れていた CM では富士山を織り交ぜたものがあった。日本はアジアをリードする国である事がうかがえた。海外に出て、日本という国を客観視したとき、日本という国にはすばらしい文化がたくさんある事に気づいた。しかし、それに気づいて自分の国を誇りに思っている日本人は果たして何人いるのだろうか。タイは君主制であり、日本と同じように天皇のような存在である国王がいる。毎朝 8 時と夜 6 時には国歌が流れ、その間は道行く人たちが立ち止まるという光景が

みられた。家には必ず国王の肖像画があり、国王の事を尊敬するという文化が根付いている。愛国心に関して、日本人はタイを見習わないといけないと感じるとともに、日本の事をもっと知りたいと感じた。そして、そのことを教師になったときに今回タイで学んだことを織り交ぜながら子どもたちにも学んでほしいと感じる。

取り留めのない文章であったが、最後まで読んでいただいたことに感謝する。また、今回お世話になったチェンマイ大学の学生や先生方、また行動を共にした札幌学院大学の方々、そしてタイでお世話になった方々みなさんに感謝する。

Korp kun kap!（ありがとう！）

タイに行って得たもの

久保　孝彰

私は今回タイに行くのは３回目でした。しかし、チェンマイに行くのは初めてでした。チェンマイはタイの第二の都市であり、大都会のバンコクと比較すれば小さな都市と聞いていました。世界では首都と第二の都市は大きく異なる街であると言われます。出発する前から、どんな街だろうと期待をしていました。私の期待通り、チェンマイはバンコクとは全く違う街でした。そして、すばらしい街でした。

私はチェンマイで英語を中心としてコミュニケーションを行いました。日本の大学生は英語が得意ではありません。しかし、タイの大学生のほとんどが英語を使えます。私は英語でのコミュニケーションを行う上で、困ったことはありませんでした。また、仲良くなるにつれて、日本語、タイ語、英語の三カ国の言語が入り混じって話していました。私はタイ語をほとんど知らない状態でタイ王国に行きましたが、帰るころにはタイ語の単語や短い文章であったら伝えることができるようになっていました。これは私がどの程度タイ語がわかり、どんな言葉を知っているか、ということを友達たちが理解してくれていたからです。同様に、私は友達たちがどの程度日本語を理解しているかがわかり、わかりやすい日本語は極力使うようにしました。お互いの言語を共有することで、よりいっそう仲良くなれたと思います。何度も話すことで、お互いを知り、素晴らしい思い出ができました。

私はタイ王国で多くの人と話をしました。チェンマイ大学の学生である世話役の人たち、ホームステイ先の家族、札幌大学の人達、さまざまな文化を持った人たちと出会いました。チェンマイ大学の学生は私たちにタイの大学生らしさを教えてくれました。同じ世代でも、国が違うと考えていることも違います。お互いの国を比較しながら話すことで、日本とタイの文化を共有することができました。

ホームステイ先の家族は自分の家族のように私を迎えてくれました。タイ語しか通じない場合もあったので、会話には苦労しました。しかし、お互いに理解しようとすることで、不思議と意味が通じることが多くありました。家族生活の中に入り込むことで、タイの人達の暮らしが見えました。チェンマイとドイタオの暮らしは全く違うものがあり、二つの街でホームステイをすることで違いを知ることができました。慣れたころに移動してしまったので、次にタイに行った時にはもっとゆっくり話がしたいと思います。

札幌学院大学のみんなとは、はじめ仲良くなれるか不安がありました。香川大学からは３人しかプログラムに参加していなかったので、大人数の大学生には抵抗があり

ました。しかし、そんな不安は初日からなくなりました。お互いに知らないタイの文化に一緒に驚き、一緒に食事をし、一緒に行動することで、すぐに仲良くなりました。同じ日本人であっても、お互いに全く知らない土地で育ったことで微妙に違う文化を持っています。香川大学と札幌学院大学のよい交流になりました。

私が最も強烈に異文化と出会ったのはドイタオでした。家族はお父さん、お母さん、お姉ちゃん、弟の４人家族でした。お父さんは大工さんのようでした。朝早くに起きて、庭を掃除したりしていました。お母さんは笑顔がまぶしく、よく世話をしてくれました。お肉屋さんをしているので、いつも料理をしてくれました。お姉ちゃんは恥ずかしがり屋ですが、スポーツ万能です。私を昼にサッカーに連れ出し、夕方に家に帰ってくると、夜はバレーボールに連れ出してくれました。村の子どもの遊び方を教えてくれました。弟はいつも私の手を握って、一緒について来てくれました。私がタイ語をわからないとわかると、さまざまな物の名前を教えてくれました。私のホームステイの隣の家にはお父さんの姉の家族が住んでいました。その家族とも毎日一緒にご飯を食べていました。村には家族や隣人とのつながりが強く、コミュニティーがしっかりしています。村の人々はお互いに助け合いながら生活をしていました。今の日本には少なくなってしまったすばらしい文化だと思います。

タイに行って日本人にとって興味がわくものは食べ物です。日本にはない果物、日本にない料理、日本より安価でおいしい食べ物、食べたことのない調味料など、毎回の食事が楽しみでした。日本では高価な果物も安価でした。日本人にとって不安なく食べられる料理は焼き飯でした。焼き飯は日本よりも安くておいしかったです。日本同様にタイ王国は中国の文化が多く入ってきています。さらに、タイ王国の主食は米なので、日本人にとって親しみやすい食文化を持っています。焼き飯は日本人にとって親しみやすい料理でした。「タイすき」は日本のすき焼きと異なり、日本にはない形の鍋で作り、チリソースで食べます。日本人にとっては想像しにくい「すき焼き」ですが、おいしいです。また、タイ王国の緑茶には砂糖が入っています。無糖と書かれているものもありますが、タイ人はあまり好んで無糖の緑茶を飲みません日本人とは全く違う感覚です。どの食事からも私は異文化を感じ取ることができ、大変満足しています。

私はチェンマイに行って、多くの人と出会い、多くの文化に触れ、多くの不思議な物を見ました。この経験はチェンマイに行かなければ知ることがありませんでした。日本にいると、日本にあるものが常識となります。しかし、日本人の常識は世界の常識ではありません。世界には様々な文化を持った人が住んでおり、様々な考えの人たちがいます。全ての

人の考えを知ることはできませんが、自分の中に新しい視点が加わりました。チェンマイでお世話をしてくださった方々に感謝します。また、日本でタイの素晴らしさを伝えていくたいです。

タイの人々や文化から学んだこと

香川大学教育学部 4 年
06L118　三谷　沙織

1.　はじめに

今回の CMU-SGU Intercultural Exchange Programme 2010 では，たくさんの素敵な方々に出会い，貴重な経験ができた。事前に buddy とメールでのやりとりがあったため，スムーズに交流を深めることができた。全てのプログラムが有意義な経験となったのは, buddy たちのサポートをはじめ，出会い，共に時間を共有することのできた全ての人たちのおかげである。活動する中で感じたことやタイの国について学んだことについて，以下，述べたい。

2.　異文化理解の大切さ

チェンマイ大学の学生と共に活動することを通して，互いの文化の違いについて考えを深めることができた。以下，特に印象的であった点について, 2 点挙げたい。

１点目は，あいさつである。Buddy たちとの毎朝一番の会話は，「朝ご飯食べましたか？」という質問から始まった。そのことば通りにとらえ，朝ご飯の内容について，普通に答えていた。しかし，“ Have you already eaten? ”は，タイの人たちにとっての「おはよう」のあいさつであったことを知り，驚いた。こうしたあいさつの背景には，タイの人たちにとって，「ご飯」が大切なものという考えがあるのだと思われる。市場やマーケット，ショッピングセンター等がだんだん普及しているものの，ホームステイ先では，自給自足の生活が大切に残されていることを知った。そして，作ってくれた料理に対して「アローイ（おいしい)」と伝えると，大変喜んでくれた。1 つのあいさつや文化の違いから様々に考えられることを実感した。

2 点目は，時間についてである。今回のプログラムでは，スケジュールが細かく決められていたものの，記載された時間通りに行われたものはほとんどなかった。時間厳守の重要性を考えている自分にとって，大変違和感のあるものであった。この違和感は，集合時間と開始時間を同じものとみなしていた自分の価値観の違いによるものだと気づかされた。チェンマイ大学の学生の様子から，集合時間にだんだん集まり，みんなで語り合う時間をとり, 30 分後くらいから開始されるということがわかるようになったのである。みんなで集い，ふれあう時間を大切にしていることが理解できた。『何かをその時間から始めたいと思うのならば, 30 分前に集合するように伝えておかなければならない』という buddy のことばにも納得させられた。こうした文化の違いを理解できることで，タイの人たちの文化は，素敵だなあと感じるようになった。

また，タイの文化についてたくさん学ぶことができた。活動の中で疑問に感じたことに対して，質問すると, buddy たちが詳しく説明してくれたからである。そして，日本の文化に近いものがあるときには，そのことを伝え，日本についても発信することを意識していた。こうしたやりとりは，共に活動し，交流を深めることを通して，実現できるものであると実感できた。これらの

ことから，お互いの国の文化を知ることは，お互いを理解し合う上で，何よりも重要だと再確認できた。

3. Doi Tao Village Stay でのコミュニケーション

Doi Tao Village で過ごした 4 日間，一番感じたことは，子どもたち同士，大人たち同士，そして，子どもと大人がつながっていることであった。小学校を中心とした 1 つのコミュニティという環境が大きいと考えられる。また，村の人たちのあたたかさも大きく影響していると感じた。先生方も，いつも笑顔で子どもたちと接しており，先生自身が子どもたちや私たち日本人とのかかわりを楽しんでいることが伝わってきた。

ことばで自分の思いを伝えることは難しかった。ことばで理解し合うことは，重要なことである。しかし，ことばでのコミュニケーションができないことで，表情やジェスチャーで一生懸命に伝えようとできたともいえる。そして，特に子どもたちとカルタや折り紙の遊びやサッカー等，共にふれあうことを通して，何とか通じ合えるということを実感できた。

4. タイの国から学んだこと

その他にも，タイの国について，たくさんのことを学ぶことができた。特に印象的であった点について，3 点挙げたい。

1 点目は，仏教についてである。タイの国民の 95%以上が仏教徒という，仏教国タイ。プログラムの中で，タイの寺院をいくつも訪れたが，子どもから大人まで，本当にたくさんの人がお参りをしている姿を目にした。ホームステイの子どもたちとも毎朝，近くの寺院にお参りに行っていたが，家族で一週間に一度は訪れることを知った。こうしたタイ国民の信仰心の深さにふれ，仏教が国民の深く生活と関わっていることがうかがえた。

2 点目は，国王についてである。国王はタイの人たちにとっての誇りであることを知り，buddy に尋ねると，『国王は，私たち国民のために，また貧しい人々のために，一生懸命に様々な事業をしてくださっています。国王のことを話すと涙が出そうになります。』と涙を浮かべながら，伝えてくれた。在京タイ王国大使館によると，タイの国民は，『国王は私たちのために頑張ってくださっている。だから国王のためなら私も頑張る。』という考えをもっているのだという。優れた数多くの王のもとで，西欧列強の植民地支配からも社会主義の拡大からも独立を守り，政治・経済，社会の安定した国に発展してきたという歴史やこれまで行われてきた農地開拓や食物の新種開発など，400 以上もの「王室プロジェクト」という現国王の取り組み等，こうした国王の姿や信念に国民が胸を打たれ，国王への尊敬を強めていったのだと考えられる。

3 点目は，タイの家庭についてである。子どもたちの親に対する尊敬の念については聞いていたが，ホームステイで家庭生活にふれることを通して，実感することができた。高校 3 年生と中学 2 年生の姉妹は，両親や祖父母に対して，いつも敬意を払っていることがうかがえた。そして，当然のように，進んで家の手伝いをしていた。また，核家族の家庭も増えているようだが，私の出会ったホストファミリーは，近所や地域とのつながりを重んじるところであった。Doi Tao

Village のような朝でも夜でも，近所の人々が行き来し，語り合うという素敵な暮らしであった。こうした素晴らしい環境の中で子どもたちが育つことで，自然と大人たちへの信頼感を育むことにつながるに違いない。

5.　最後に

今回の CMU-SGU Intercultural Exchange Programme 2010 の様々な活動を通して，たくさんの素敵な人たちと出会うことができた。チェンマイ大学の先生方やスタッフの方，共に活動した buddy たちや札幌学院大学の先生方と学生，ホストファミリー，それから Doi Tao Village で出会った人たち。今回のプログラムが自分にとってかけがえのない貴重な時間となったのは，出会えた全ての人たちと一緒に参加することのできた香川大学の先生方と仲間たちのおかげである。感謝の気持ちでいっぱいである。

来年度からは，講師として，小学校の子どもたちと接する。日本の子どもたちにタイでの素晴らしい経験と出会いを伝えると共に，日本について発信できる子どもたちを育てたいと考えている。

参考 URL

Royal Thai Embassy　在京タイ王国大使館　http://www.thaiembassy.jp/
タイの仏教と宗教概説　http://www.jyaaku.com/travel/thai/buddism/